

小説家の藤岡陽子さんを招いた特別教育対談 「言葉の力で未来を変える」を開催

10月19日(日)、SAPIX代々木ホールで特別教育対談「言葉の力で未来を変える」が開催されました。今回お迎えしたのは、小説家で看護師の藤岡陽子さんです。5月に刊行された「僕たちは我慢している」をはじめ、受験をテーマにした小説でも知られています。対談では、「受験生の親として大切にしたいこと」「国語力を伸ばすための工夫」など、子どもの未来を切り開くヒントが数多く語られました。

子どもの学びに役立つヒントを 講演と対談で多角的に紹介

今回の特別教育対談では、小説家で看護師の藤岡陽子さんと、サピックス教育事業本部の広野雅明先生が登場。「言葉の力で未来を変える」というテーマの下、教育や家庭での学びについて語り合いました。

藤岡さんは、看護師としての経験を生かしたデビュー作『いつまでも白い羽根』をはじめ、数々のヒット作を執筆。『金の角持つ子どもたち』など受験を題材にした作品では、多くの保護者の共感を集めています。

京都府出身の藤岡さんは、新聞社勤務を経て26歳で小説家を志しました。「有名選手の取材を通して、その裏にある光の当たらない人々の物語に強くひかれ、そうした声を多くの人に届けたい」と感じたことが転機だったそうです。その後、タンザニアの大学に留学するなどユニークな経歴を重ね、小説家をめざしながらも安定した職業に就くことも視野に入れ、30歳で看護専門学校に入学。約12年にわたる執筆活動の末、38歳で小説



SAPIX代々木ホールで開催された特別教育対談。予約の受付が始まってすぐに満席となり、午後の部が追加されました

家デビューを果たしました。今回の対談では、20年以上の看護師経験や、自身のお子さんの受験体験を踏まえ、藤岡さんの教育をめぐる深い対話が展開されました。

対談の前には、サピックスキッズの石垣知子先生による講演「本から広がる、国語の世界」が行われました。石垣先生は、読解力を支える「言い換える力」と「受け取り力」が文章の背景やメッセージを深く理解するうえで重要だと強調しました。また、比喩を探したり、表現を言い換えたりする遊びを通じて感性を磨く方法など、親子で楽しく学ぶ工夫も紹介しました。

最後には、サピックス小学部の溝端宏光先生が「長く役立つ“学び”のコツ～すぐ役立つものはすぐに役立つなくなる」と題した講演を実施。灘中高の伝説的国語教師といわれた橋本武先生の授業を例に、「体験から得る学びの深さ」や「失敗や遊びのなかにこそ本当の学びがある」ことを語りました。さらに、子どもの成長を支えるためのアドバイスとして、「できないことより、できたことに目を向け、努力の過程を評価してあげてください」と力強く話しました。



サピックスキッズの石垣知子先生。現代の中学入試で求められる読解力と、その育て方について具体的に説明しました



サピックス小学部の溝端宏光先生。試行錯誤することに価値があり、失敗や遊びのなかにこそ本当の学びがあると語りました

「努力」はお金で買えないもの 受験の経験が子どもにとっての武器に

特別教育対談「言葉の力で未来を変える」は、広野先生が藤岡さんに質問する形式で進みました。自己紹介の後、中学受験をテーマにした藤岡さんの作品『金の角持つ子どもたち』が話題に上ります。藤岡さんは「現在、大学生の長女と高校3年生の長男は、2人とも中学受験を経験しました」と述べ、この作品が長男の中学受験をもとに書かれたことを紹介。続けて、「中学受験は単調な努力の積み重ねに見えて、実は家族全員が全力で挑むドラマチックな世界です。その経験と家族への思いを物語に込めました」と語りました。

物語は、サッカーに夢中だった6年生の少年が突然、中学受験に挑む姿が本人・母親・塾講師の三つの視点で描かれています。そのなかには、親子で中学受験に向き合い、塾の指導を受けながらこつこつと努力する姿も描写され、藤岡さんは「学力はお金で買えないもの。自分で積み上げなくてはなりません。それも伝えたいことの一つでした」と言います。これに対し、広野先生は「印象的だったのは『勉強は努力を学ぶのに最も適した分野。学力は人生を裏切らない。子どもにとって武器になる』というセリフです。努力の成果は、子どもにとって大きな財産になると考えています」と共感を寄せました。

この作品の4年後の成長を描いたのが『僕たちは我慢している』です。“御三家”と呼ばれる進学校をモデルに、勉強と部活との両立、家庭環境、親と子どもの希望進路の相違、見いだせない将来の目標など、高校生が共感できるような悩みが描かれています。藤岡さんは「高校生がどうやって大学受験のスイッチを入れ、自分を奮い立たせ、成長していくのかをこの本で伝えています」と話します。信頼できる先生との出会いが子どもを変えることも物語に盛り込まれています。もちろん、取材も行いました。難関国立大学の学生や進学校のOBに学習時間や参考書についてリアルに質問し、読者が「こんな勉強法があるのか」と感じられるよう、実用的な面も意識して執筆したそうです。

親の思いをことばで伝えることが 子どもの未来を支える力になる

続いて、講演は保護者への具体的なアドバイスに移りました。「読書についてどう考える?」という質問に対して、



家族がどのように受験生を支えるべきか、さまざまなヒントを語る藤岡陽子さん



特別教育対談の進行を務めた、サピックス教育事業本部の広野雅明先生

藤岡さんは「本を通じて自分では経験できない人生を体験でき、将来を決める判断材料になります」と、その重要性を強調しつつ、「読書嫌いの長男には無理に読ませず、見守るようにしています」と続けます。国語力を伸ばす工夫として、「国語の勉強をしない長男には、『考え方が違う』ではなく、『考え方に齟齬がある』など、日常会話であえて難しいことばや正しい文法を使って、自然に覚えられるようにしています」と、独自の実践法を紹介しました。

一方、「受験生を支える親として大切なことは?」という質問には、次の四つを挙げました。一つ目は「親も一緒に受験に挑むという姿勢を見せる」ことです。藤岡さんは、子どもにだけつらい思いをさせず、並んで座って勉強したり、難関大学の問題に挑んだりしたと言います。二つ目は、「勉強以外の努力をほめる」ことです。成績が伸び悩んでいるとき、「毎日、早起きができているね」などと声を掛けているそうです。三つ目は、「時間の概念を教える」こと。「夏休みの学習計画表を可視化したことで、子ども自身が受験までの日数を意識し、みずから計画を立てるよう促しました」と自身の経験を紹介しました。四つ目は、演題でもある「言葉の力で未来を変える」ことです。親のことばは子どもにとって指針になるとのことで、藤岡さんは長男が野球をやめたときに書いた手紙を実際に読み上げました。手紙を通じて学力も大切にしてほしいと伝えた結果、「野球をやめて、別人のように勉強するようになり、明らかに受験に向かう姿勢が変わった」と振り返りました。

最後に、藤岡さんは「自分の思いをことばで伝えることが、子どもの未来を変え、支えにもなります」と締めくくりました。広野先生も「親のことばの大切さと、その重みをあらためて実感しました」と話し、この日の対談は幕を閉じました。